

「ゲーセンで出会った生意気格ゲームスガキにわからされちゃう!」
..ボイスドラマ台本

■Track01

「……ん……おっ?」

「……やってるやってる……ふふっ」

「こんにちはっ♪ ねえおじさん、それオンライン対戦やってるの?」

「ふーん、そうなんだ」

「この格ゲー、家庭用も出てるのに、わざわざゲーセンに来てまでネット対戦やるって、よっぽど物好きじゃない?」

「その熱中っぷりだと、今日はじめて触ったってわけでもなさそうだし」

「あたし? あたしはたまたま寄っただけだし」

「……にしてもさ、な〜んかおじさん弱すぎない? さっきから全然勝ててないじゃん」

「ねえ『対空』って知ってる? 相手のジャンプ攻撃を落とせないと、ヤラレ放題になっちゃうよ?」

「あー、今のコンボミスは痛い。ダメージ取れるところで取っとかないと」

「ん〜今の中段は立てなきゃダメでしょ。反応悪すぎ〜」

「いやあ……そこでその技は確反もらっちゃうって」

「ほらね」

「はい残念〜 ま、け！」

「ぷぷっ、悔しそうな顔！ おじさんかわいそう。なけなしの百円、ドブに捨てちゃったようなもんだね♪」

「……あーあ、落ち込んだじゃった！ なっさけな〜い」

「おじさんみたいなザコちゃんはある、飴でもチュパチュパして、元気だそ？ はい、飴あげる」

「それにしてもおじさん、へたっぴだね♪ もっとおうちでトレーニングしなよ〜」

「え、何？ あたしが後ろからうるさかったから負けたって？」

「う〜わダッサ！ 自分が弱いだけのくせに、人のせいにするのヤバすぎ〜 マジありえないんだけど」

「どんだけ格ゲーやってるの？ え、まじ？ そんな長くやってる割に弱くない？ もっかい初心者からやりなおしたら？」

「素人よりはそこそこできるっぽいけど、あたしに言わせたらドヘタだね」

「……あ、傷ついた？ ごめんね〜そんなにメンタル弱いだなんてえ、あたし知らなかった〜♪」

「あっ、そ〜だ！ ねえおじさん、ここで会えたのもなにかの縁だしさあ……」

「あたしとおじさんで、対戦してみない？」

「あ〜、今笑ったでしょ？ あたしこう見えても結構強いんだよ？」

「いつもおうちでネット対戦やってるし、大会とかにだって出てるもん」

「ネット記事にだって名前載ったことあるし、SNSとかだと結構有名なんだけどなあ〜？」

「あたし、ミトラっていうんだけど、知らない？ ミートーラ！」

「ええ〜、マジかあ。結構フォロワー多いのになあ」

「じゃあさ、あたしのランク帯教えてあげよっか？ 聞いたらきつとびっくりするよ」

「はあ？ 聞くまでもないって？ 人のことバカにしすぎじゃない？」

「いいよ、そこまで言うなら勝負する？ あたしが弱いっていうなら、もちろん受けて立つよね？」

「言ったね？ じゃあやろっ♪」

「あ、言っとくけどお互い手加減なしだからね？ あとになって、女の子相手だから手加減しちゃった〜とか言うの禁止だよ」

「本気でおいでよ。分かせてあげるからっ」

「ふふ、あたしのことバカにした仕返しに、絶対恥かせてやるんだから……♪」

「じゃあ2先でやろっか。2ラウンド先取制、先に2回勝ったほうが勝者だよ！」

「ちょうど隣の筐体が空いてるし、こっちでやらせてもらうね」

「あ、そうだ」

「ねえおじさん、どうせなら罰ゲーム決めようよ。そのほうが盛り上がるでしょ？。」

「あたしが負けたら、そうだね……おじさんのことバカにしたことは謝るし、あたしに勝てたこといっぱい褒めてあげる♪」

「でも、あたしが勝ったら……ふふっ、あたしのいうこと、いつこ聞いてもらおうかな」

「大丈夫大丈夫！ ジュース買ってとか、ぬいぐるみ取ってとかそういうのだからあ」

「……多分ね」

「ふふっ、じゃ、まずは軽く小手調べ」

「えい、えい……とう、とう！」

「うわっおじさんつよいっやばいよこのままじゃ負けちゃうよえっ」

「あゝ体力ゲージもちよっとだ……追い詰められた……」

「なっんちゃって♪」

「様子見終了！」

「もういいよ、今でおじさんの実力、ぜえっんぶわかったから」

「言っとくけど、あたし容赦しないからね！」

「おじさんの動き見てるとよく分かるよ、投げキャラ苦手でしょ？ 対策も知らないそうだし！」

「ごめんね、あたしそういうのすぐ分かるんだ♪」

「遠慮なく、ガンガン投げてくから……ねっ！」

「ハイ、1ラウンドもつらい。らっくしょく」

「うーわ、舐めてかかったのバレバレ！ 顔真っ赤になっちゃってるうぷぷ！」

「はあ、腕が鳴るう。やっぱり格ゲーはオフでやるのが熱いよね♪」

「ささ、次々い！」

「もうお互い様子見は終わったし、最初から本気でやってってもいいよね？」

「ほらほら、どうした？ 逃げてばかりじゃこっちのペースだよ？ ん？ ん？」

「あたしのジャンプ攻撃、全然対応できてないじゃん！ 対空下手すぎて笑っちゃうんですケド！」

「はい投げ抜け！ そんな子供騙し通用しませうん！」

「思考わっかりやすい！ おじさんほんと格ゲー下手あ！ ザコお！」

「コンボだってズタボロだし、コマミス多すぎ！ 何年格ゲーやってんの！？」

「うわ、わっかりやすいパナシ！ 顔真っ赤なの??」

「あつ、ハイ今の反撃不可です！ おつかれさまでした！」

「残念。激弱。2ラウンド目もよーで勝っちゃった♪」

「これだったらわざわざメインキャラじゃなくてもよかったな！ サブキャラの練習台にちょーどよさそう」

「さ、早くコイン入れてー。どんどんいこ」

「おっ、さっきと動き違うじゃん。もしかして戦法変えてきた？ いいよいよ、格ゲーマーはそうでなくちゃね！」

「あ、待って待って今の立ってたのに！なんで食らっちゃうかな？」

「む、こっちの手の内みて、ようやく本気出したって感じ？ ちょっとはやるじゃん」

「じゃあこっちも戦い方変えてみよ！これはどうさばく？」

「おっと、さっきまでの攻めはどうしたの？ そんなんじゃられ放題だよ？」

「あーら、形勢逆転。はい、今度はこっちの番だよ」

「さっきまでのお返し！」

「はい勝利。ちょー余裕。またまたあたしが勝っちゃったね！」

「これで最後！」

「な、んかもう飽きてきちゃったし、さっさと決めちゃおっかな」

「ほらほら、どしたどした？ 本気出さないとこんなお子様にストレート負けしちゃうよ？ いいのかな？」

「はい勝利ー！ 1ラウンドも取られることなく終了♪」

「おじさん、びっくりするぐらい弱いんだね。ざっこ！もっと精進しなきゃ」

「ねえ悔しい？ ねえ今どんな気持ち？ ねえ、ねえ？」

「うわ、おじさん顔こわい。誘拐されちゃう」

「ははは、顔真っ赤にしちゃって面白〜い♪」

「さ、あたしが勝ったことだし、どんな言うこと聞いてもらおっかな〜」

「ん？ 忘れたの？ 罰ゲームだよ、罰ゲーム。負けたらあたしの言うこと、なんでもひとつ聞いてもらうんだからね」

「まさか、あたしにボロボロに負けたくせに、このままノコノコ帰れるなんて思っ
てないよね？」

「うん、よろしい！」

「う〜ん、そうだなあ。じゃあ〜……」

「おじさんに、あたしのおもちやになってもらおっかな♪」

「ん？ 聞こえなかった？ おじさんが、あたしの、おもちやに、なるの！」

「いや、うん、おもちゃが欲しいとかじゃなくてえ……あ〜もうめんどくさい！」

「はいおじさん、目つぶって！ 絶対あけちゃダメだからね……！」

「あたしが手ひいたげるから、なにも言わずついてきて」

「いいとこ連れてってあげるから！」

「ほらはやく、ぐずぐずすんなあ〜……！」

■Track01 終〜

■Track02

「はい、目あけていいよ！」

「じゃじゃーん、突然ですが問題です。あなたが今いるココはどこでしょう？」

「そ、正解。トイレー」

「にひっ、でも男子トイレじゃないよ？」

「ここは、女子トイレ！」

「だからおじさん、もし他の誰かに見つかったら、女子トイレ侵入罪？　みたいな
ので逮捕になっちゃうよ」

「そうなっちゃったら大変だねえ、こわいねえ」

「だから、バレたくなかったら黙ってなきゃ、ね♪」

「え、なんでこんなところに連れてきたかって？」

「そんなの、おじさんを玩具にするために決まってるじゃーん」

「あたしね、こうやって何も知らないおじさんに悪戯するの、大好きなんだあ」

「あたしより一回りも二回りも年上の男の人があ、あたしみたいな小さな女の子に
悪戯されてえ、何も仕返しできずに悶えるのお、見ててすっっっごい面白いんだよ
ね♪」

「おうっとお、下手に声出さないほうがいいよ。見つかったちゃうからさ」

「もしかしてなんだけど、おじさん、女の子のこと、あくんま慣れてないでしょう。その上、小さな女の子に興奮しちゃうロリコンだ」

「見てたらわかるんだあ〜♪ だって、さっきからなんかビクビクしてるし、オドオドしててきもいし」

「でも、あたしを見る目だけはどことなくギラギラしちゃってんの♪ 目泳がせるフリして、さりげなく胸とか足とか見てるの……全部バレちゃってるよ」

「子供ちっぱい好き？ スカートから覗く太ももに触ってみたい？ んう〜？」

「え？ 大人をからかうなって！？ ぷっふふ、ウケるう〜！ くそうざ〜」

「大人なのに、そんなにヨワヨワでいいの？」

「無駄に歳くってる割になっさけな〜い！ 頼りなさすぎて、こどおじ丸出し♪」

「ってか、めっちゃめっちゃ汗かいちゃって……おじさん臭がさっきからキツイんですケド。新陳代謝どうなってんの〜？」

「はい？ 帰してくれって〜？」

「や〜だよ、ここから面白くなるんだから！ 負けた人に人権なんてないんだよ」

「いいから、ほら、そこ座って！ おじさん大きいんだから、立ってたら何もできないじゃん！」

「しー、うるさい、だまれっ」

「だ〜くら〜！ つべこべ言わずにあたしのいうこときくの！ おじさん、あたしに負けたんだよ？ あたしに逆らうつもりい？」

「言っとくけど、あたしムカつかせたら思いっきり声だすからね？ いいの？ スマホだって持ってるし、いつだって通報できちゃうんだからね？」

「そのちっぽけな頭使って精一杯想像してみてよく」

「この状況で他の人に見つかったらさ、どっちが悪者かなんて一発で分かるじゃん？ お巡りさんに捕まっちゃうの、どっちだろおね♪」

「あたしかなあ？ おじさんかなあ？」

「ふふっ……立場、理解できた？ あたしに逆らおうなんて思っちゃダメだよ。はい、わかったなら座る！」

「そうそう、それでいいの。最初からちゃんと言うこと聞いておこうね♪」

「おじさんの人生、今ここでゲームオーバーにしてくないでしょ？」

「それにこれは罰ゲームなんだから、あたしの玩具になってくれなきゃ！」

「うん？ やれるもんならやってみろってえ？」

「そんな事言いながらおじさん、足震えてますけどだいじょうぶう？」

「あっはは、おもしろい！ でも罰ゲームなんだから、そうでなきゃね！」

「そうだ、じゃあこうしょっか」

「あたしの罰ゲームに声も出さずにちゃんと耐えることができたら、仕返しにあたしのこと、好きにしていよいよ♪」

「何をするのもおじさん次第。今まで生意気言ったことも、ゼーんぶ謝ってあげる」

「その代わりい、声出しちゃったら……そこがおじさんのゲームオーバー♪」

「きゃー、変態だー！ 変態がトイレに入ってきたー！ めちゃくちゃにされちゃうー！ 助けてーおまわりさーん！」

「あ、もしもしおまわりさんですかあ？ 助けてください！ 女子トイレに無断侵入してきた脂ギッシュなおじさんに襲われちゃいそうなんですう……って」

「そこでおじさんは、ハイ終了ー。パトカーに乘せられさようならー」

「ねっ、面白そうでしょ？ あたしってこういう勝負ごとが大好きだから、余計に燃えてきちゃった」

「えー？ こんなお子様に負けるわけないってー？ ほんとかなあー？」

「おじさんのその強気な態度、いつまで続くんだろおねー？」

「あ、先に言っておくね。あたしがおじさんに触れるのはいいけど、おじさんがあたしに触るのは絶対禁止ー！」

「だって、それじゃあ罰ゲームになんないし、おじさんの力で抵抗されたら、女の子のあたしが勝てるはずないじゃん？ それってフェアじゃないよね？」

「まあ、おじさんが本当にロリコンじゃないっていうなら、あたしに触るわけないし、ね？」

「あたしに触っても負け、あたしの責めに屈服しても負け♪ こんな不利な状況で、果たしておじさんは生き残れるかなー？」

「さ、そろそろ準備はいい？」

「じゃあラウンド1、スタート！」

「さあーで、どこから攻めちやおうかなー」

「おじさん、耳弱そう。遊んじゃおうと♪」

「どっちの耳が弱いのかなあ？ 右かな？ 左かな？ 右かな？」

「ふう〜……っ」

「ふふっ、びくびくしてるの、かわい〜」

「ねえ知ってる？ この間、授業で習ったんだけど……耳ってさあ、神経がいっぱい通ってるんだってさ」

「だから、刺激されたらすごく敏感に、気持ちよく感じちゃうんだって！ つまりい、お耳も立派な性感帯ってわけ♪」

「どう？ ゾクゾクする？ ねえゾクゾクするう？」

「あれあれ？ おじさん、鼻息荒くなってきてるよお？ これから女の子に虐められると思って、興奮してきちゃった？」

「あはは、面白〜い。ざ〜こ」

「ふう〜……ふう〜……」

「こんなこと、誰にもされたことないでしょ？ おじさん彼女はいたりするの？ ……って、いるわけないか」

「彼女がいたら、こんな時間からボッチでゲーセンなんてこないもんね〜♪」

「ふう〜……っ」

「あはは、やせ我慢してるう？ 表情でバレバレなんですけど。ざあこ」

「でも、まーだ降参は許さないからね」

「ふうー……」

「くすぐったいでしょ。でも声を出しちゃダメだよ？」

「……そうそう、やればできるじゃん。その調子、その調子」

「さあ、いつまで我慢できるかなあ？」

「ふうっ……ふうっ……」

「ふふっ、楽しー♪」

「おじさん、すごい悔しそう。そうだねえ、悔しいよねえ、びくびくしちゃうよねえ♪」

「いいよ、才能あるよお。調教される才能ってやつ？ くすっ」

「ふうー……」

「クスッ、男の人でも、こんな情けない声出すんだね♪ どう？ 悔しい？ 自分より年下のちっちゃい女の子にこおんなに虐められて」

「ふっ、ふうー……」

「あれ、もしかして喜んでる？ 喜んじやったら罰ゲームになんないじゃん」

「こんなちっちゃい子に耳フーフーされて喜んじやうようじゃ、人生お終いだよ？」

「ふうー……ふうー……」

「どう？ 降参？ もっとしてあげよっか？」

「ねえどしたの？ さっきから声上ずってんじゃん。きもーい」

「遠慮しないでいいんだよ？　あたしは優しいからさあ、こういうのが好きなんだっただけよ」としてあげる」

「ふうー……」

「ははっ、おじさん、すっかりおとなしくなっちゃったねえ？」

「格ゲーでバトルする前の威勢はどこいったのカナ？」

「あんなに強気な態度とってたのに、今はこおんなに好きなようにされて、恥ずかしいの？」

「まー、女子トイレに座らされて女の子に好き放題されてる時点で、恥ずかしいか」

「こんなみっともないオトナ、相手してあげるのあたしくらいじゃないんじゃない？」

「ふうー……ふうー……」

「やせ我慢は体に毒だよ」　ほら、もっと声出してえ」

「声出したらオシマイだけどね」

「ふうー……ふうーっ……」

「じゃあ、今度は左の耳いってみよっか……！」

「ふうー……ふうー……」

「くすっ……おじさん、びくびくうって肩が震えちゃってるよお？　そんなに気持ちいいの？」

「うゝん？ 首は横に振ってるけど、体は正直みたいだよお？」

「おじさんの苦しむ声、もっと聞かせてえ？」

「ふっ、ふうー……」

「ははっ……おもしろい その顔超ウケる」

「ふうー……」

「我慢しないでいいんだよ？ もっと気持ちよさそうな顔見せて？」

「大丈夫、写真に撮ったりしないからさあゝ、おじさんがあたしの言うこと聞いているうちはね！」

「ふうー……ふうー……」

「ふふっ、ねえ知ってる？ さっきから、ココおっきくなってきてるんですけど？」

「さわさわ、さわさわ……ねえおじさん、これはなにかなゝ。なにかなゝ？」

「おかしいなあ……さっきまでこんなじゃなかったのに、いつの間にかカチコチになってるよおゝ？」

「ねえ、もしかして、小さな女の子にお耳フーフーされて、おちんちん大きくしちゃったのゝ？」

「えゝまじい？ おじさんって超のつくドヘンタイだね♪ 明らかにロリコンじゃゝん」

「こんな女の子に興奮するとかやばあ、きんもゝい☆」

「え？ こんなお子様に興味ないって？」

「うつそだあ……さつきからずっとハアハアしちゃって、こんなところ大きくしな
がら言っても全然説得力ないよお」

「こんな程度でおつきくしちゃうなんて、さすがにざこすぎい。童貞丸わかりすぎ
てウケる」

「男ってほんと、どうしようもない変態ばっか!」

「ねえ。おじさんってさ、セックスって……したことある?」

「ないんでしょ?」

「このおちんちんの本当の使い方、知らないんでしょ」

「あ、た、し、が、お、し、え、て、あ、げ、よっ、か?」

「イマドキの女の子ってえ、すっごく進んでるんだよ……?」

「女の子はみーんなエッチなこと知ってるの……エッチなことに興味津々でえ、男
の子なんかより全然詳しいの」

「ねえ、あたしの知ってるエッチなこと……もっと教えてほしい?」

「……ぷぷっ、ばあーか 本気にしちゃってマジウケる ほんとにしてあげるわ
けないじゃん、なに期待してんのザコお」

「女の子にバカにされてくやしー? からかわれて泣いちゃう? 頭おかしいん
じゃない? 子供からやりなおしたら?」

「ま、やりなおしたところで、おじさんみたいな人間なんて一生童貞だし、ロリに
いじられて興奮してる時点で来世でも童貞確定しちゃってるようなもんだからあ」

「今みたいな惨めな人生が妥当かもね」

「あははっ、おつかし〜！ あ、ほらほら、泣いちゃダメだよお、元気出して童貞おじさん……あたしがお耳ふうふうしてあげるからあ」

「ふうー……」

「あははっ、こんなんで興奮できるんだから、むしろ童貞でラッキーだったじゃん」

「ふうー……」

「痛い？ 切ない？ 苦しい？」

「パンパンに張り詰めたおちんちん、ズボンから出したくしょうがないよねえ……？」

「でも、だ〜め」

「自分で触るの禁止ー。今そこに触ったらあ、あたし大声出しちゃうからね」

「これは罰ゲームなんだから。おじさんが気持ちよくなるようなことさせてあげるわけないじゃ〜ん」

「あそこギンギンにして苦しんでるおじさんの今の姿、すっごく情けなくて絵になるよお……」

「写真に撮って残しちゃおかあ〜？ そしたら、いっぱい拡散してあ・げ・る」
♪

「え、それだけはやめてって？ ふふ、どうしよっかなあ〜……」

「おじさん次第だね☆」

「あたしの機嫌損ねたらあ、どうなるかわかんないよお〜？」

「あ、そだ。ねえねえ……お耳ふうふうしてばかりだと、冷たくて寒いでしょ？」

「今度はさ、優しくあっためてあげよっか？」

「はあゝ……」

「ね、あたし優しいでしょ？　こういうことされて、気持ちいい？」

「はあゝ……」

「ふふっ、フーフーされるのとは、また違う感じ？」

「お耳、ゾクゾクするう？」

「そんなに苦しそうな顔してえ……気持ちいいの、わかってるんだからね？」

「はあゝ……」

「こんなこと、誰にもされたことないでしょ？」

「はあゝ……」

「あったかあい吐息、気持ちいいねえ……？」

「今度はこっち……」

「はあゝ……」

「やだウケる　興奮してる顔、まじでもいんだけど♪」

「もっとしてあげよっかあ……」

「はあゝ……」

「こういうのが好きなんだ……おじさん。あたしの吐息感じる？　あたしの口の中、あったかそうでしょ？」

「はあ……」

「ふふっ、そんなに嬉しいのお？　格ゲーも弱けりや、お耳もザコなんだね」

「こんなんで気持ちよくなれる人の気が知れないなあ……♪」

「さてと、今度は何してあそぼっかな？」

「あ、そだ、おじさんの体臭チェックしてあげよっか」

「男の人って清潔感ってのが大切だしねえ。ちゃんと毎日気を使ってるか、あたしが直々にチェックしてあげる」

「まあまあ、そんなにいやそうな顔しないで、さ……」

「まずは、髪の毛の匂い嗅いでみよっか……髪は当然、毎日洗ってるよね？」

「すんっ、すんすんっ……」

「うーわ、ちょっと待って……くっさあ！」

「え、汗かきすぎじゃない？　じゃなくても、普段からちゃんと洗ってる人の匂いじゃないなあ……！」

「首元は……？」

「すんすんっ……」

「うえ……やばあ……何この匂い、おじさん体臭まじやばいよ。くさすぎ」

「くさぁ……まじくさぁい……汗臭というか、おじさん臭というか……ムワツと漂ってくるの、鼻に刺さるんだけど」

「すんすんっ……」

「はぁ……やっぱぁ、きつつ……!」

「頭クラクラしそう……脳みそおかしくなっちゃうって、この匂い」

「ねえおじさんさぁ、臭いの自覚ある？ まじえぐいって、これ。犯罪的な匂いだよ。もう一生外出歩いちゃダメなやつだ」

「生きてるだけで公害だね♪ 可愛そう」

「すんすんっ……んっ……」

「うう……ほんとくさぁ……」

「すんすんっ……はぁ」

「う……特に首元とかやばくない？ まじくさぁい」

「ここから漂う匂いが、おじさんってよりお爺ちゃんに近いかも」

「お耳の後ろとかぁ、3日くらい洗ってなさそうな匂い」

「え……？ いまので傷ついちゃった？」

「そんな泣きそうな顔しないでよ、男のくせに情けないな」

「すんすんっ……はぁ」

「うえ……鼻が曲がっちゃいそう♪」

「ん？ 匂いかがれるの嫌だ？ そりゃ嫌だよね。うんうん、わかるわかる」

「でもね、嫌だ。って言われたらやりたくないのが、あたしなんだよね」

「すんすんっ……はあ」

「うっわ……胸から脇にかけて、スパイ匂いするう……」

「ねえおじさん、毎日ちゃんとお風呂入ってる？ ゲームばっかしてないで、ちゃんと身だしなみ整えな？」

「そんなんだから彼女の一人もできないんだよ 自業自得ってやつ！」

「すんすんっ……はあ」

「うーん……でも、なんだろう。こういうおじさん臭さ、あたし結構嫌いじゃないかも」

「癖になるっていうの？ よくわかんないけど、臭いものほどかぎたくなるみたいな？」

「中毒性っていうのかなあ……」

「すん、すんすんっ……はあ」

「ねえ何ニヤニヤしてんの？ほんとキモいんだけど。鼻の下のびてきてるよ？」

「ちっちゃな女の子に匂い嗅がれてバカにされて興奮するとかあ、まじで変態じゃん？」

「すんすん、すんっ……はあ」

「だからさあ……おじさん、なんで罵倒されてどんどん大きくしてんのぉ？ まくじありえないんですけどぉ」

「特に、ここからものすごく濃い匂いさせてるし……なに期待しちゃってんの？」

「きんも……」

「うわっ、キモいって言われただけで、あそこびくびくって動いたぁ……変態っ」

「DMで童貞でロリコンの変態って、ほんと救いようなさすぎでしょ」

「まじクソ雑魚すぎい……生きてる価値ないよねっ」

「でも。そんなおじさんにもちゃーんと価値があるってこと、あたしが教えてあげる！」

「あたしの玩具としての、だけど♪」

「じゃあ今度はぁ、何をして虐めてあげよっかなぁ……？」

■Track02 終っ

■Track03

「ねえザコおじさん……今度はぁ、お耳ペロペロしてあげよっか♪」

「ほおら、嫌がらないの！ 忘れたの？ あたしの機嫌損ねたらどうなるかっ」

「もう大声出しちゃおうかなっ？」

「ふふ、それだけは嫌ぁ？ くすっ、だったら、きちんと黙ってましようねっ？ ♪」

「さってと、どちらにしようかな……みぎっ」

「じゃあ、右からしてあげるねっ」

「は……むっ……ちゆるっ」

「ふふ、びっくりした？」

「気持ちよすぎて大きな声だしちゃんないよう、しっかり我慢して、ね？」

「じゃ、ラウンド2……いってみよっか♪」

「ぺろっ……ぺろっ……ぺろっ」

「ちゅっ……んちゅ……ぺろ、ぺろ」

「んふっ……飴を舐めるみたいにい……ぺろっ、ぺろっ」

「はあ……ちゅっ……ちゅぱっ、ぺろっ、ぺろっ」

「こおんな感じでペロペロされるの、どんな感じい？」

「ぺろっ、ぺろっ、ぺろぺろ……」

「まるでおじさんが飴になっちゃったみたいだね」

「こういうのされてえ、さらに大きくなってえ……気持ちの悪い、へ・ン・タ・
イ・ド・ス・ケ・ベ・さん♪」

「ん、ぺろっ……ちゅ……ぺろっ、れりゅ……ちゅぶっ」

「れろお……んれりゅ……ぴちゃ……ちゅぶっ、んちゅ」

「くちゅ、ちゅぷっ……れろっ、ちゅ、ちゅぱっ……んちゅ」

「ふふっ、まあゝた切ない声でてるう……たゝのしゝ」

「おじさんの反応、超面白い……友達に見せてあげたいくらいだよお」

「ええ……ダメエ？ もゝケチだなあ」

「ふふ……まいつか、今はあたしが独り占めしてるもんね♪」

「……ぺ……ろっ」

「おじさんは今……あたしだけの、玩具なんだからあ」

「ぺろっ……ぺろっ……ぺろっ……」

「ちゅるっ、ちゅぱ……れりゅ、れろっ……ぺろ」

「れろっ……れろっ……ぺろっ……れろ、れるっ……ちゅるっ」

「さっきより体、ぴくぴくうってしてきたね……♪ そんなに気持ちいい？」

「ぺろっ、ぺろぺろ……れろお……んはあ……んちゅ、れりゅっ」

「ちゅ、ぺろっ、ぺろっ……んっ、ぺろぺろ……ずるるっ、れろっ」

「れろお……ちゅっ、ちゅぱ……れりゅ、りゅちゅっ」

「女の子とキスするよりも先にい、お耳ナメナメされちゃったねえ……可愛そう」

「ってかあ、相変わらずお耳弱いんだねえ 反応良すぎでしょ、ちょーきも。ざあゝこ」

「格ゲーだと反応悪いくせに、こっちの反応はいいだなんて……マジウケる」

「こおくんちっちゃん子にお耳舐められて、犬みたいに盛りのついちゃった、ど
くしようもない変態さん♪」

「さっきからずっとはあはあ言ってるじゃん……面白いから、もっとしてあげる
♪」

「ぺろっ、ぺろっ、ぺろぺろ……」

「れちゅ……んちゅ……ちゅるるっ……ぺろっ」

「んちゅう……れりゅ、れろ……ん、はあ……ちゅるっ」

「今度は、左のお耳で耐えてみよつかあ……♪」

「ぢゅ、ぺろっ、れりゅ……はあ、ぺろっ」

「ちゅっ……れりゅっ、れろお、れちゅ、んちゅう」

「お子様耳フェラ……感じちゃう……？ 舌の動き気持ちいい？」

「ぺろっ、れろっ……ちゅ、んちゅ」

「れろお……れりゅ、ちゅぷっ、れりゅっ」

「れる、ちゅぱ……ちゅるっ、れろっ」

「んっ……はあ……」

「ねえ、おじさん……想像してみてよ」

「おじさんの、ギンギンに硬くて、おっきくて、そのくせ気弱そうにピクピク震えてるザコチンポ」

「それを……あたしのこのヌルヌルであったかゝい舌で、ペロペロ舐め回されちゃうの」

「こうやって、飴を舐めるみたいにく」

「ん……ぺろっ、ちゅ、れりゅ……はぁ……れりゅ、れろ、ちゅぷっ」

「んふう……はぁ……ちゅ、れろっ、れる」

「どお？ 興奮するでしょお……？」

「ふふっ……あたしのエッチなベロに犯されちゃうおちんちん、可愛そうだよねえ？」

「やだ、ほんとにしてあげるわけじゃないじゃん……調子のつちやだあめ♪」

「あたしがクソザコおじさんに優しくするとも思った？ 大間違い」

「全部、あたしがやりたいからやるの……あたしがやりたくないことは、やりませくん」

「で……も……おじさんの態度次第では、考えてあげなくもない……かもしれないかな？」

「あたしにフェラチオしてほしいなら……この程度でイッちゃわないようにしなきゃ、ね？」

「はい、お耳に集中してえ？」

「ん……ちゅ、ぺろっ、ちゅぷ……はぁ……れりゅ、ちゅるる」

「はぁ、ちゅるるっ……ちゅるっ、ぺろ、れりゅ、れちゅっ」

「感じやすいお耳……もっと気持ちよくしてあげまっちゃうからねえ」

「ぺろっ……ぺろっ、ぺろ、れろお、れろっ」

「ぺろっ、ぺろっ、ぺろぺろ……れりゅっ……ちゅぱ……ちゅぱ」

「ちゅるっ……ちゅぱ、れるれろっ……れりゅうう……ちゅぷ」

「今度はお耳の穴にいれちゃおっ♪」

「れろっ……れちゅっ……じゅるるっ」

「ぢゅるっ……んれちゅっ……じゅるる、ちゅぷ、れりゅるるっ」

「ちゅるるっ……じゅる……れちゅっ、んあゝ……れりゅっ、ぢゅる」

「ちゅぱっ……れろっ……んちゅ、ちゅ、ちゅむっ……んちゅ」

「あー、だゝめ、何馴れ馴れしく触ろうとしてんの？ あたしがいつ許した？ 人の言うことが聞けないのかなあゝ？」

「触るの禁止っていったよね？ あたしに触ったら、自分がロリコンのクソ犯罪者だって認めることになっちゃうよゝ？」

「二度目はないからね？ 絶対触ったらダメなんだから……わかった？」

「ぶぶっ、『わかりました』だってえゝ。もう完全にあたしのいいなりじゃん♪ おもしろゝ」

「ちゅるるっ……じゅる……れちゅっ」

「ちゅるっ……ちゅぱ……んっ」

「ねえ……どう、気持ちいい？ おちんちんに効くう？ ふふっ、あたし、上手でしょお？」

「なんでこんなに上手いのって……？ そりゃあ、おじさん以外の人たちもいっぱい玩具にしたもん♪」

「みんな感じやすいザコ耳で、ちょく面白かったしい」

「あれえ、もしかして……妬いちゃってる？ ぷぷっ、だっさく きもく」

「なあくにいい？ あたしに玩具にされてるのは自分だけって思ってた？？」

「ばあか！ んなわけないじゃくん。あたし、このへん拠点にして色々遊んでるんだあ♪」

「おじさんみたくないいろんなプレイヤーを叩きのめして、罰ゲームって言ってトイレに連れ込んでんの」

「自分が、小さな女の子に虐められてるって気づいたときのあの表情は、忘れられないなあく」

「つーまり！ おじさんもあたしにハメられたってこと！ 最初から最後まで、まんまと踊らされちゃったってわけく」

「みくんな格ゲー弱いくせにイキっちゃって、あたしみたいな女の子プレイヤーなんて敵じゃないって顔してるけどさあ」

「自分が負けるはずがないって思い込んでるおじさんが、対戦でラウンドが進むごとに少しずつ顔が引きつってくの、もう最っ高におかしくておかしくて」

「だからあたし、そういうおじさんたちの隣の台に座ってプレイするの好きなんだ」

「おじさんの、悔しがる顔が一番良く見えるから♪ にひっ」

「みんなプライドだけ高いけど、こうやって遊ばれてすぐ心ズタズタにされちゃうんだあ♪ みんな見てて面白いんだよお」

「……ふふっ、だくけくど……安心していいよ。今まで遊んだ中で、一番虐め甲斐のあるお耳をしてるのは、間違いなくおじさんだから♪」

「こおんなに感じやすくて、反応が面白い人、見たことないもん」

「……くすっ、ちょっと嬉しくなっちゃってんの、マジ超ウケるんですけど」

「勘違いしちゃだめだよ。おじさんが今までで一番、誰よりもクソザコだっていつてんの♪」

「わかりましたかあ？　ざあくこ　わかったら、大人しくしてくだちゃいねえ」

「んふう……れろっ……れちゅっ……じゅるるっ」

「ぢゅるっ……んれぢゅっ……じゅるるっ」

「ちゅるるっ……じゅる……れちゅっ」

「女の子甘くてエッチな舌使い、お耳で味わえるなんて中々ない体験だよお……?」

「もっと喜んでもいいんだよお、こういうの好きなんでしょ？　ロリコンのクソザコ童貞おじさん♪」

「ちゅるっ……ちゅぱ……んっ」

「れりゅれりゅれりゅ……れりゅっ」

「んれろっ……ちゅるるっ」

「はあ……はあ……」

「おじさんの反応おもしろすぎて、つい夢中になっちゃった♪」

「でも、あたしが本気出したら、まだまだこんなもんじゃないよお？」

「れろっ……れぢゅっ……じゅるるっ」

「ぺろっ、ぷちゅ、れろっ、れりゅれろ」

「ちゅぱ……んふっ……れろ、ぢゅるっ」

「んちゅう……れろれれおっ……ちゅぱっ」

「そんなにイヤイヤしちゃって……おっかし〜♪」

「もう、どっちがお子様だかわかんないね……？」

「れろっ……れぢゅっ……じゅるる、ぢゅるっ……ちゅぷ」

「ちゅるっ……ちゅぱ……んっ、ふう……れろっ」

「んれろっ……ちゅるる……ちゅぱ、ちゅぱ、りゅるっ」

「あ……もしかしてえ、おじさん右より左耳のほうが弱いんだあ？」

「じゃあ、もっといっぱい虐めちゃお♪」

「ちゅぱっ……れろっ……んちゅ」

「んれろっ……ちゅるる……っ」

「れりゅれりゅれりゅ……れりゅっ」

「あれれえ、おっかし〜な〜……さっきまで嫌がってたのに、だんだん嫌がらなくなってきたねえ」

「ここもビンビンになってきたし、もしかして完全に喜んじゃってるう??」

「あゝあ、嬉しがっちゃったら罰ゲームになんないし、そんなんじゃ面白くない」

「もうやめちゃおっかなあ〜?」

「え、何? もっとやってほしいって? どうしよっかなあ……う〜ん」

「逆にこのまま、おじさんずっと放置したままでも面白いかも? 放置プレイってやつ〜! キゃハ」

「女の子に耳ナメナメしてほしくて、涙ながらに許しを請う無様なおじさん……絵になるう」

「え〜? しょうがないなあ……そんなにお耳舐め舐めしてほしいならあ、ちゃんとお願ひしますって言って?」

「臭くて、キモくて、どうしようもない役立たずのお耳を、優しく舐め舐めしてくださいって、言ってみて?」

「……………う〜、声小さすぎて聞こえな〜い。モゴモゴ言ってちゃ聞こえるわけ無いじゃん?」

「もっとちゃんと、はっきり言って?」

「え? なに? うん……うん……」

「……………うん、やーだ☆」

「ぷっはは！ ウケる！ マジでさっきの台詞復唱しちゃってんの！ 必死すぎだし、ちょく悲惨！」

「プライドないんですかあ、おじさあくん」

「もう、しょうがないにやあ……！」

「あんまり虐めると、おじさん本気で落ち込んだじゃいそうだから、このくらいにしてあげよっかな」

「んくく、ちゅ」

「ほら、これでやる気だ？ もっとしてあげよっか……」

「……ちゅ、ちゅっ……ん……ちゅ……ちゅう」

「ちゅっ……ちゅぷ……んふ、ちゅう」

「えっちな少女の甘いキス、堪能しちゃう？」

「いいよ……？ じゃあ、キスもしたことなさそうなおじさんに、あたしがキス教えてあげるね」

「んふ……ちゅるっ、ちゅ……ちゅぱ……んちゅう」

「んくく、ぺろ、れろっ……れちゅ、ちゅぷ、んちゅう」

「え？ あたしがさっきまで食べてたキャンディの味する……？」

「ふふ、甘酸っぱいキスの味……ってやつだね」

「んちゅ……ちゅ、ぷちゅ……れちゅ」

「ん……おじさん、もしかして今のがファーストキスだった？」

「ふふっ、だあゝって、キスどへただもん！ あうあうしちゃって、初めてなのすぐわかるよお」

「残念でした♪ 童貞おじさんのファーストキスは、いじわる幼女に奪われちゃいましたゝ……ふふっ」

「おじさんの初めて、いっぱいあたしに奪われちゃってるね……悔しい？ イライラちゃう？」

「ほんとにイライラしてるのは、おちんちんのほうかなあ……？」

「ふふっ、からかえばからかうほど面白いなあ、おじさんは……もっと虐めたくなっちゃう」

「ぺろっ、れえろっ……んふう、れろっ」

「おじさんのお顔も、ナメナメしてあげるね……キャンディになった気分、味わっちゃおっか♪」

「ぺろ……ちゅぶ、んふう……れろ、れろお……れろっ」

「ん、もう……無精髭が舌にザラザラして痛いなあ……社会人なら、ちゃんと綺麗に剃っときなよお」

「れろ、れろお、れろっ、くちゅ……ちゅぶ……ん、ふう」

「れろお、ちゅぶ……くちや、れろっ……」

「ふふっ、おじさんのお顔……よだれにまみれてベタベタだね……」

「何ちよっと嬉しそうな顔しちゃってんの？ 虐められて喜ぶとかありえないし」

「でも、そんなに気持ちよかったんだあ……虐められる才能あるよね、おじさん」

「はあくむっ、ちゅ……ちゆるっ、れちゅう……くちゅ」

「ぢゆるっ……んれぢゅっ……じゆるるっ」

「ちゆるるっ……じゆる……れちゅっ」

「おじさんみたいなクソザコロリコン童貞おじさんは、頭真っ白になっさけなーい声だけだしてればいいの」

「今のおじさんにできるのは、豚みたいにブヒブヒ鳴いて、お願いします〜、単純童貞クソザコチンポから、ぶっ濃い精液、出させてくださ〜いって」

「ちんちん命乞いするだけの簡単なお仕事だ〜け♪」

「理解できるかなあ？」

「ま、頼まれても、まだ出させてあげないんだけどね♪」

「ちゆるっ……ちゅぱ……んっ」

「れりゅれりゅれりゅ……れりゅっ……」

「こっちの耳もすごく感じるんだ？　ねえ、どっちのお耳虐められるのが好きい？」

「ぢゆるっ……んれぢゅっ……じゆるるっ」

「れろっ……れぢゅっ……じゆるるっ」

「ぺろっ、ぺろっ、ぺろぺろ」

「ぺろっ……れろっ……ちゆるっ」

「れりゆれりゆれりゆ……れりゆっ」

「どっちも気持ちいいよね？　ね？」

「ふふっ、ブヒブヒっって気持ちの悪い声だしちゃって、鳴いてばかりじゃわからないよ？」

「ねえ、こうやってえ……」

「ぺろっ……ぺろっ……ぺろっ」

「ちゅるっ、ちゅば……れりゆ、れろっ……ぺろ」

「耳の周りペロペロされたりい……」

「はむんっ……っちゅ」

「はむう……んむ……んむふう」

「耳たぶをあぐまく啞えられたりい……」

「れろっ……れろっ……ぺろっ」

「ぺろっ、ぺろぺろ……れぢゅっ」

「穴の周りを舌でくすぐられたりい……」

「ぺろっ……れろっ……れりゆりゆりゆ」

「ぢゅるるるるっ……りゅるっ」

「穴の中を、ベロで激しくほじられたりい……」

「んちゅ……ちゅうう……ぺろっ」

「お耳に優しくキスされたり……」

「こういうの、すっごく気持ちいいでしょお、おじさん♪」

「ぺろっ……ちゅ、んっ……ぷはぁ……」

「ぢゅるっ……んれぢゅっ……じゅるるっ」

「ちゅるるっ……じゅる……れちゅっ」

「ちゅるっ……ちゅぱ……んっ」

「ね、もう正直になっちゃお……。最後まで気持ちよくなりたいんだよね……？」

「もうここまで来ちゃったらあ、あとに引き返せないもんねえ……でしょ？」

「ふふ、やっと正直になったね？ えらいえらい♪」

「いいよお……じゃあ、おじさんのおちんちんも、あたしが優しく虐めてあげるね♪」

■Track03 終

■Track04

「はい。じゃあ、おじさんの使いみちのないその役立たずおちんちん、出して？」

「んもううるさいなあ！ いいからほら、ごちやごちや言ってないで早く……！」

「んっ……うわぁ、おちんちんおつきくなってる……♪　こんなのがズボンの中に入ってたなんて、マジ信じらんない……」

「びくびくって動いてるう……ふふ、気持ちわるう……いやらしく、ムリ……マジ犯罪級じゃん」

「子供にいいように罵倒されて、玩具みたいに扱われて、そんなでおちんぽ大きくしちゃうなんて、キモすぎて吐きそ♪」

「そんなにあたしの攻めが気持ちよかったんだぁ……お耳ペロペロされて、興奮しまくって、チンポビンビンにして……マジめっちゃウケるう」

「あたしに、虐めてくださーいって言って、情けなく震えてるねー」

「ほんっと……どうしようもない、クソザコのキ・モ・ブ・タ・さんっ……だね♪」

「アハ、こんなちいちゃな女の子に攻められてガチガチに勃起するなんてえ、恥ずかしいとか情けないと思わないわけ？」

「ねえおじさぁん……今の状況、ちゃんとわかってる……？」

「はぁ……もう全っ然わかってない顔……悩みそ足りてる？　もしかしてスカですかぁ？　頭働いてますかぁ？」

「おじさんは今、女子トイレで、小さな女の子に虐められながら、ブザマに勃起させたおちんちんを出してるんだよ？」

「大の大人がなっさけなぁーい、あたしがおじさんの立場だったら生きていけないなぁ……みっともない、超みじめー、きんもー」

「ねえ、さっきからずーっと切なそうな顔してるけど、もう限界なの？　限界なんですよ？」

「ねえ、あたしにお耳舐められながら、気持ちよくイキたかったんでしょ？ クソザコ中年♪」

「さいてゝ。もう、しょうがないにやあ……いいよ。ここまで我慢したんだもんね、楽にさせてあげる♪」

「はい。じゃあ早速、自分の手で握ってシコシコゝって、しごいてみよつかあ」

「……え？ しごいてくれるんじゃないの、って？ あたしがあ？」

「ハア？ 頭おかしいんじゃない？ あたしがおじさんの、こゝんな臭くて汚いサイター無能ちんぼ、触るわけ無いでしょ？ 手が汚れちゃうしい」

「それに、さっきからなんか変な匂いしてるしい もしかして、ちょっと漏らしちゃったりしてるんじゃない？」

「うわあ、ばっちいゝ♪ ありえなゝい」

「だあかあらあ、自分で自分のをシコシコすればあ？」

「おじさんが不細工で、無様で、醜くて、役立たずで、いやらしいおちんちんを、惨めにしごいてるとこ、あたしが全部見てあげるからさ♪」

「ずっと、自分のおちんちん触りたかったんでしょ？ シコシコゝって、気持ちよくなりたかったんでしょ？」

「だったら、おじさんがいつもやってるオナニー、今この場で見せて？」

「そ、いつものやつ。おじさんが、毎晩エッチな動画を観たり、エッロゝいマンガを読みながら、必死こいてやってるオナニーだよ♪」

「それ、見せてって言うてんの……！」

「さっきまで、あたしのエッチな声を聞きながら、エロおく耳を舐められながら、おちんぽブザマに勃起させてたんでしょ？」

「ほら、やっとチャンスが訪れたんだよ？　格ゲーマーは、一瞬のチャンスをモノにしてかなきゃでしょ？」

「ティッシュの中に精液吐き出す以外、なぐんの取り柄もない、大きいだけの粗大ごみおちんちん……」

「今この場で、女の子にじゅっくりと観察されながらヌキヌキできるチャンスだよお？」

「……………」

「あつは……♪　やば……。ほんとにしこり始めた……」

「うあ、やっぱあ……えぐ……！　息荒げたおじさんのオナニーとかいつ見ても笑うんですけどお……」

「うわあ、やば、やばあ……♪」

「誰かに見られながらおちんちん扱くの、初めてでしょ？　どう？　興奮する？」

「さすが、格ゲーやってるだけあるなあ……スティックレバーの扱いはお手の物って感じだね」

「ねね、ちょっとそれ、中指と薬指で挟んでさ、右に動かしてみてよ……いいからいいから」

「右にぐいぐって動かしてみて……？」

「いいね♪　じゃ今度は、左に動かして……？」

「はい、前に倒してえ……？」

「後ろに引いてえ……?」

「ぷっははは!! まくじチンポスティックじゃん! あたしの言うとおりにマジメに動かしてちゃって面白お、なに操作してんのおく?」

「アハ、怒っちゃったあ? そんな顔真っ赤にしないでよお♪」

「はい、じゃあ……おじさんの好きなだけ、思う存分シコシコして? おじさんのみっともない姿、全部さらけ出ちゃお?」

「あたしが言うとおりに、自分のおちんちん優しくく包み込んでえ、上に、下に、ゆっくり擦るんだよ……」

「あたしのリズムにあわせて……せえの、シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「ほら、シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「あ! 勝手に早くしちゃだーめ! あたしの言うとおりのリズムでシコるの!」

「あたしがそんな簡単にイカせてあげるわけないじゃん?」

「そんなに早くイッちゃったらあたしが面白くないしい……!」

「あたしがいいっていうまで、絶対イッっちゃダメだからね? これは命令なんだから」

「じゃあ、いくよお?」

「はい、シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「そうそう、ゆる〜っくり……ゆる〜っくりだよお。おじさあん、やればできるじゃあ
ん♪」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「あたしの声にあわせてえ……？」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「ふふっ、おめめギラつかせてえ、必死になって擦りすぎじゃん♪ きんもー」

「先っぽからエッチなおつゆがいっぱい溢れてるう……」

「我慢できなかったんだねえ……そんなにシコシコしたかったんだねえ……！ 待ち遠しかったんでちゅね♪」

「イキそう？ もうイっちゃいそう？」

「でもまだだーめ、絶対出すの禁止……！ 我慢我慢！ 大人なんだから、それくらいできるでしょお？」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「そのままのリズムキープして……そう、その調子その調子い。脳内お猿さんでも、ちゃんと言うことは聞けるんだねえ」

「くすっ、ぐちゅぐちゅって、いやらしい音、わざと立ててるでしょ？ やだきもーい」

「ちょ、もっと優しくって言ったでしょ？」

「あんま強く擦ったら、こっちまで汁とんじゃうじゃん……まじきったなくいくっさ♪」

「やっぱりおじさん、真性のドMなんだね♪ きつつい言葉でなじられて、蔑まれて……悔しいのに、興奮しちゃうタイプ」

「ありえない。やば、きもすぎ！ 何食って生きてたらそんな変態に育っちゃうの？」

「あはっ、超バカっぽい♪ 今のも興奮材料になっちゃうんだ？ すっごいマヌケ面になってるよ……」

「性癖キモすぎ……おじさんには女子トイレより檻の中がお似合いだよ♪」

「ほおら、もっと根本の方を握って、手のひら全体で、牛さんのお乳を絞るように、ぎゅっぎゅってシゴいてみて」

「はい、ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅう……ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅう」

「ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅう……ぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅう」

「そのまま、親指と人さし指で、ちんぽのカリ首握って……さっきより強めにシコシコしてみよっか」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「じゃあ、今度は親指でちんぽの入り口を塞いで、くにくに〜って動かしてみ
て？」

「くに、くに、くに……くに、くに、くに……」

「くに、くに、くに……くに、くに、くに……」

「くに、くに、くに……くに、くに、くに……」

「どう？ タマタマにキュンってきた？ 精液が無限に製造されてくの、実感でき
ちゃう？」

「くに、くに、くに……くに、くに、くに……」

「そうそう、言ったとおりにちゃんとできてる……上手上手♪」

「根本をぎゅっ、ぎゅっ、ぎゅっ……先っぽ抑えてくに、くに、くに……」

「どう、気持ちいい？ あたしの手に握られてるって想像してみて？ こんなに気
持ちいいことないよね」

「今度は、すこ〜しスピードあげてみよっかぁ」

「はい、シコシコシコ……シコシコシコ……シコシコシコ……シコシコシコ……」

「遠慮せずに、あたしの甘くて優しい声を聞きながらぁ……思う存分シコっていい
んだよ、おじさん……♪」

「ふふっ……そうそう、上手〜！ ちゃんとあたしが言ったとおりできて偉いね♪
立派立派ぁ！」

「じゃ、今度は……空いてる手でタマタマを優しく撫でてみよっか♪」

「エッチな精液が、今にも溢れちゃいそうなくらいいっっぱい溜まった、おじさんのた・ま・た・ま♪」

「あ、今ちょっと出ちゃいそうになったでしょ……正直に言わないとだめだよ？嘘ついたってすぐわかるんだから」

「ふふ、まだだゝめ♪ 射精はまだまだ禁止でゝす♪」

「はい、おちんちん握った手はシコシコしながら、もう片方でタマタマなでなでしてみて？」

「なで、なで、なで……なで、なで、なで……」

「なで、なで、なで……なで、なで、なで……」

「ねえ、おじさんの声、うわずってるよお……気持ちよすぎてたまらないって顔しちゃってるよお……？」

「くふっ、ざくこ……この程度でイキそうとか、どんだけヨワヨワなちんぽしてるの？ 男のプライドある？」

「まだあたしは射精許可出してないからねえ……？」

「はい、お手々は休まず、動かし続けてね。シコシコシコ……シコシコシコ……」

「そうそう、あたしの声にあわせて、ビンビンおちんぽ精一杯シゴいて……」

「シコシコシコ……シコシコシコ……」

「シコシコシコ……シコシコシコ……」

「ふふっ、幼女の声に興奮しちゃうようなクソザコロリコンおじさんには、お仕置きしてあげなきゃ」

「こおゝんな声で囁かれるのをオカズにシコれちゃうんだから、やっすいチンポだね♪」

「えゝ、なに？ もっと欲しい？ もう、欲しがりさんだなあ……キモいザコのくせに、要求だけは一人前♪」

「もしもゝし、聞こえますかあ……言いなりチンポ、もっとシコシコできますかゝ？」

「ふふっ、ゾクゾクする？」

「あ、手止まっちゃってるよお？ちゃんとシコシコして……言われたとおりにできないおじさんは通報しちゃうよお……？」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「ほんと、気持ちよさそうなアへ顔……もっと盛り上げてあげよっか」

「ちゅっ……んちゅ……ペろ、ペろ……」

「女の子に虐められてかわいそうなおじさんのお耳にい、いっぱいキスしてあげるね」

「あたしの耳フェラオカズにしながら、気持ちよく抜いてみよっかあ♪」

「はあゝ……ちゅっ……ペろっ、ペろっ」

「ペろっ、ペろっ、ペろペろ……れちゅ……んちゅう」

「んゝ、ペろっ……くちゅ、ちゅば……ペろっ」

「どお？ 気持ちいい？ お耳くすぐったい？」

「ふふっ……じゃあもつと激しく攻めてあげる……その代わり、勝手にイッちゃダメだからね？」

「いいよお、ほらほら、いっぱいシコシコしてえ？」

「ぢゅるっ……んれぢゅっ……じゅるるっ」

「んふう……れぢゅっ……ぢゅ、じゅるるっ」

「ちゅるるっ……じゅる、れぢゅっ……ぢゅるっ」

「ちゅっ……んちゅ……んっ、ふちゅ……ちゅぶっ」

「んふう……気持ちよかったあ？」

「あはは、おじさん、ブザマな顔してなっさけなあゝい。それでも大人の男なんですかあ？」

「ぎーこ、ざーこ。ダメな大人の見本だね♪」

「そんな情けない大人はあ、女の子に軽く罵倒されるだけでイッちゃうくらい、あっさり敗北ヨワヨワちんぽにしてあげなきゃね」

「ぎん」

「ぎん」

「ぎ……ん♪」

「ぎんこ！」

「興奮する？」

「ぎょお」

「ん……ぎょこ」

「ぎょこっ」

「ぎゃあ……こっ」

「ぎょこ」

「くそざこお」

「ザコ連呼でガンガンに勃起してる、ヘンタイ童貞の人生落伍者♪」

「変態……」

「変態」

「へんたゝい」

「変態……♪」

「クソザコ」

「キモブタ」

「ハゲカス中年」

「ヨワヨワおじさん」

「ふふ、罵倒が気持ちよくなってきちゃった？ あゝあ、新しい性癖の扉、開いちゃったね」

「ちいちゃな女の子にいいように弄ばれちゃう、ダメダメな底辺おじさん」

「格ゲーでも負けて、罰ゲームでも負けて、負けだらけのブザマな転落人生え」

「あ、そもそも最初から落ちきってるから、転落じゃないのかあ、キャハ」

「たったひとつの取り柄が、このギンギンに大きくなったちんちんだけだなんて、ほんとしようもない大人……」

「一緒に遊ぶお友達も、愛し合う恋人もない悲しいおじさんの相手してあげる女の子なんて、あたしくらいしかないんじゃない?」

「ほらほらあ、ヘラヘラしてないでおちんちに集中集中!」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「んっ……ちゅぱっ……れろっ……んちゅ」

「んれろっ……ちゅるる……っ」

「れりゅれりゅれりゅ……れりゅっ」

「ぢゅる、ちゅる、くちゅっ、ぢゅるる……んちゅ」

「んふう、れちゅ……くぶっ、んちゅ」

「ちゅるるっ……ぢゅるるっ……ちゅるる、れろっ、れろお」

「ふふっ……ほんと、虐め甲斐があっておもしろい♪ おじさんの反応、ちょっ楽しいもん」

「じゃあお次はぁ……金玉などでしてるお手々の真ん中を、ちんぽの先に押し当てて？」

「優しく包み込むように手を置いたら、手のひらの真ん中で先端をスリスリ……って刺激してみよっかぁ」

「もちろん、シコシコしてる手はそのままだよ？ はい、やってみて？」

「すり、すり、すり……すり、すり、すり……」

「すり、すり、すり……すり、すり、すり……」

「どう？ 親指でくにくにつてするのは、また違った快感でしょ？」

「ねえ、だらしない顔もって見せて？ いっぱいシコシコして？」

「すり、すり、すり……すり、すり、すり……」

「すり、すり、すり……すり、すり、すり……」

「ふぁ……ちゅっ……ちゅる、ちゅぱっ」

「ちゅるるっ、ちゅ……れちゅっ、くちゅ、れろお」

「んちゅうう……りゅるるっ、ぺろっ、くちゅ」

「んちゅー、ちゅっ……ぺろっ、ぺろっ」

「ぺろっ、ぺろっ、ぺろぺろ……れちゅ、んちゅう」

「んー、ぺろっ……くちゅ、ちゅぱ、じゅる……ぺろっ」

「はぁ……はぁ……」

「んちゅっ……ちゅう……」

「ほらぁ……シコシコする手が止まってるよぉ……？　もっといっぱいシゴいて？」

「今のおじさんにできるのは、情けないおちんちんをシコシコすることだけなんだから、精一杯働いて？」

「おじさんが情けなくよがってるところ、あたしにいっぱい見せて……？」

「もう何も思い残すことがないってくらい、気持ちよくシコシコしてみてよぉ……」

「おじさんの必死な童貞顔、あたしに全部曝けだして？」

「ん……ちゅ、ぺろっ、ぺろっ、ぺろっ、ぺろっ」

「ん、ぺろっ……ちゅ……ぺろっ」

「んふう……れぢゅっ……ぢゅ、じゅるるっ」

「ちゅるるっ……じゅる、れちゅっ」

「あは……先っぽから流れ出る我慢汁が……くちゅくちゅって、いやらし音立てる」

「今、トイレに他の人が入ってきたら、一発でバレちゃうよ♪」

「あ、だからって、手を止めちゃダメだよ？　あたしの言う通りにシコシコしなきゃ」

「じゃあ今度は、少しずつ早くしてみよっか」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「しゅっ、しゅっ、しゅっ……しゅっ、しゅっ、しゅっ……」

「シコ、シコ、シコ……シコ、シコ、シコ……」

「しゅっ、しゅっ、しゅっ……しゅっ、しゅっ、しゅっ……」

「ふふ、その調子その調子」

「んれろっ……ちゆるる……っ」

「れろお、れるお……れりゅ、るちゅ」

「ぢゆるる、ぢゆる、ちゆる……くちゅっ、んちゅ」

「ほおら……応援してあげるから、精一杯シゴいてシゴいて？」

「がんばれ、がんばれ、ざーこ。ふぁいと、ふぁいと、ざーこ。負けるな、負けるな、ざーこっ♪」

「え……もうだめえ？ もうイキそお？」

「えーうっそー。限界くるの早くない？ ったくう、だらしないなあ……これだからクソザコ童貞チンポは……」

「あ、そうだ。じゃあさ、あたしが今から数を数えるから、それにあわせて発射してみよっか」

「10から数えて、ゼロになったらフィニッシュするの。面白そうじゃない？」

「ね、できる？ ……ほんとお？ じゃあやってみよー」

「いい……いいくよ?」

「10……」

「9……」

「8……」

「7……」

「6……」

「5……」

「4……」

「3……」

「4……」

「5……」

「ろ……え? 数字が戻っていったって? なんのこと? あたし子供だからわかにゃ〜い」

「ふふつ、そう簡単にイカせてあげないよ〜♪ おじさんのクソザコ限界顔、もっと楽しませてもらわなきゃ……!」

「いい? ゼロになったらフィニッシュだからね? ゼロになるまで、ちゃんと我慢しないとダメだよお……?」

「よく聞いてね〜?」

「10……」

「9……」

「8……」

「7……」

「6……」

「5……」

「4……」

「3……」

「2……」

「1……」

「ぜ……ったい射精しちゃだーめ！」

「キャハ、危ない、今でちゃうとこだった？ 騙されちゃったね、おじさん」

「いくよお……？..」

「5……」

「4……」

「3……」

「2……」

「1……」

「1……！」

「にしっ、1の次にゼロが来るとは限らないよ♪ ムカついた？ ねえムカついたあ？」

「もっといっぱいシコシコしちゃえ！ ちんちん擦り切れちゃうまで、いっぱいシゴいちゃえ」

「5……」

「4……」

「3……」

「2……」

「1……」

「……………」

「え？ まだゼロじゃないよ……？ ルールだからね？ ちゃんとわかってるよねえ、おじさん」

「ふふっ、こうやって焦らされるの、実は好きだったりする？」

「え〜？ もう限界？ ほんとのほんとに……？ お願いしちゃうの？ こおんなちいちゃい女の子に、大の大人が頭下げちゃうの？」

「なっさけなく♪ おじさんプライドも何もかもズタズタだね！ 超おもしろ」

「はあ……仕方ないにやあ……」

「じゃあ、今度こそ最後……あたしのカウントダウンにあわせて、思いっきりイッてみよ？」

「いくよ……?」

「10……」

「9……」

「8……」

「7……」

「6……」

「5……」

「4……」

「3……」

「2……」

「1……」

「ゼロ♪ はい、ふいにーっしゅ……！ イケ、イケ、いっちゃえ……！」

「んっ……あはっ、すごい勢い。めっちゃ出てるし……びゅっ、びゅっ……ふっ」

「ほらもっと、出せ♪ 出せ♪ 出せ♪ 出せ♪」

「んふう……精液、こおんなに溜めてたんだあ……ほんといやらしいおちんちんだね」

「どろっどろの精液、これがずっと、おじさんのタマタマのなかで泳いでたんだね♪」

「女の子のいいなりになって、どこにも到達できずに無駄に発射されちゃった精液ちゃん、かわいそ……おじさんのこと軽蔑しちゃうな♪」

「あ、ってかあたしの足にかかっちゃってるんですけどお……まじ汚い……さいつて」

「これ、ちゃんと拭き取ってよね、おじさん」

「くすっ……もう、あたしの言いなりおちんちん……ほんと無様♪ ざこちんぽ」

「完全敗北しちゃったね♪ お疲れ様、くそざこおじさんっ」

■Track04 終了

■Track05

「ねえおじさあん……さっきあれだけ射精したのに、まだギンギンなのはどういうことですかあ？」

「もしかしてまだ出したりなかったわけえ？」

「今までいろんなザコを玩具にしてきたけど、おじさんほど性欲旺盛な人は初めてだなー♪」

「ふふ、クソザコの変態キモ童貞のくせに遊び甲斐あるじゃん？」

「あたし、そういうの嫌いじゃないよ？」

「じゃーあー、今度はどうやって遊んであげよっかなあ？」

「あ、そだ。今度はぺろぺろって、おじさんのおちんぽフェラチオしてあげよっかあ？」

「え、なに？ フェラチオって言葉がでた瞬間、めっちゃ鼻息荒くなったけど、なにになに？」

「まさか……冗談で言ったのに、ほんとにしてほしいんだ……？ うっわー、そんなに興奮しちゃうなんて、ドン引き」

「確かに、さっきは『フェラチオしてほしいならー』とか、『あたしのお口に舐められたら』とか挑発したけど、ほんとに要求しちゃうんだ？」

「あたし、おじさんなんかよりもずっと子供なんだけどな」

「おこちゃまにおちんちん舐めさせようとするなんてえ、冗談抜きで犯罪になっちゃうと思いますよお？」

「……ふふっ、おじさんのその困った顔、もっとからかいたくなっちゃう」

「もお、しょうがないなあ。ま、ここまでちゃんとあたしの言うこと忠実に守って頑張ってきたんだもんね？ そろそろご褒美も欲しくなっちゃうか」

「ってか、あたしがおじさん放置したせいで、このまま他の女の子に凸してマジのガチに性犯罪されても困るしね」

「もう何も失うものがない今のおじさんは、後先考えずあっさり性犯罪しちゃいそうだしなー」

「あ、ってことはあ……今おじさんと2人きりのあたしも危ないかも？」

「……ふふ、なあんだ……もじもじしちゃって、ほんと最初の威勢なくなっちゃったね……情けなあい」

「くっそざあこ♪ 底辺以下のよわよわざこ」

「しかたがないなあ……可愛そうな童貞クソザコおじさんのお願い、聞いてあげる」

「その代わり、あたしに触るの禁止ってルールは続行。あたしがいいって言うまで出しちゃダメなものそのままね」

「いい？ わかった？ 理解できたかな？」

「ザコおじさんはあたしの玩具なんだから、持ち主のいうことには忠実に従わないとね……？」

「じゃあ、そのガチガチに張った気持ち悪いおちんぽ、もう一回あたしにじっくり見せてみてよお……」

「今更恥ずかしがることないでしょ？ ほら、手どけて、おちんぽ見せてえ？」

「……………」

「うつわ……でつかあ……こんなにギチギチに張り詰めて、やばあ……」

「それに、くっさ……♪ 一度精液吐き出して、めっちゃめっちゃ濃い匂い発してる……発酵臭、最悪♪」

「マジでキモい、グロお」

「なあにい、ようやくあたしにフェラチオしてもらえて期待して、さっきより大きくなっちゃったのお？」

「マジウケる」

「やれやれ♪ それじゃあ、あたしが……おじさんのこの生意気できつたな〜い
発情おちんぽに、いっぱい負け癖つけてあげるね♪」

「はー、きつたないな〜、触りたくないな〜♪ でも、触ったほうがおじさんの反
応いっぱい楽しめそうだからな〜？」

「ん……しょ」

「わ！ 手に触れただけでびくんってした〜♪ やだなにこれ、きもちわる〜！」

「大きいな〜、あたしの手に収まりきらないくらい大きい……！ それにすごく…
…ん、あつついし」

「先っぽからヨダレだらだらお漏らししちゃってえ……どんだけ期待してたの、こ
のド変態♪」

「えー？ うるさいな〜！ あたしがおじさんに触るのはいいの！ おじさんがあ
たしに触れるのが禁止なの♪」

「ねえおじさんのおちんぽ、今まで見てきたどのザコチンポよりも大きいかも〜
♪」

「でも、立派なのは見た目だけで、その本性はお子様に罵倒されてイッちゃうクソ
ザコちんぽなんだよね〜」

「すん、すん……」

「んっ……わくくっさあ……さっき吐き出した精液の匂いが、まだこびりついてる
じゃん」

「ちょっと嗅いだけで、くっさ……」

「すんっ、すんっ……はあ〜っ」

「ほ〜んとくさい……ねえ、これがまともな人間の出す匂いですかあ？　ありえないんですけど〜」

「こんなくさ〜い匂いをおこちゃまに嗅がせるなんて、どういう神経してるんですかあ〜？」

「ちゃんと毎日お風呂に入って、もっと丹念におちんぽ洗ってください〜い」

「それとも、おじさんみたいなクソザコヨワヨワ人間って、み〜んなこんな匂い出しちゃうんですかあ〜？」

「公害ですね〜この世から消えちゃってください〜い♪」

「すん、すん……はあ〜」

「すん……はあ〜」

「う〜、くっさ……くっさ」

「ツンとする酸っぱい匂いの中にい、イカみたいな生臭さがブレンドされてえ、まるで死んだ魚みたいな匂いするよお……」

「すん、すんっ……はあ〜。すん、すんっ……はあ〜」

「ありえない、やば……超くさ〜……」

「すん、すんっ……はあ〜。すん、すんっ……はあ〜」

「ムレムレで超くさい……ほんとやばあ……」

「先っぱの匂いもやばいけど……おちんぽの根元に行くにつれて、どんどん匂いが濃くなってくじゃん……」

「すん、すん……はあゝ。すん、すん……はあゝ」

「う……ん、くさあ……くさい、くさすぎい……ちんちんの匂い……超こもってる……」

「すん、すんっ……はあゝ。すん、すんっ……はあゝ」

「タマタマの裏あたりが、一番濃厚な蒸れ臭してるう……」

「おじさんが興奮すればするほど、刺激臭のような匂いがどんどん濃くなってきてるんですけど?」

「ちょっとくさすぎて目がいたくなってきたかもゝ! キヤハ」

「すん、すん……はあゝ。すん、すん……はあゝ」

「パンツからボロンしたおちんぼ、クンカクンカされるの、そんなに興奮する?」

「まるでさっきの射精がウソみたいに、もうカチカチに勃起しちゃってんじゃん」

「大人の男の人は、大人の女の人でしか興奮しないって聞いてたんだけど、あれは嘘だったんだね?」

「だっておじさん、もうずっと小さい女の子で勃起しっぱなしだもん♪ おまけに射精までしちゃったし。完全なる異常者だよ」

「すん、すん……はあゝ。すん、すん……はあゝ」

「あは、童貞の匂い超くさゝい」

「すん、すん……はあゝ。すん、すん……はあゝ」

「ねえおじさん、未成熟な女の子に興奮しちゃうだなんて、自分が犯罪者予備軍の自覚あるう?」

「ないよねえ、だってさっきからだらしなくい顔して喜んでるし。クソザコ勃起の完全敗北射精、たくさん楽しんじゃったもんね？」

「あーあ、ゲームですら女の子に勝てないおじさんなんてえ、ずっと一生負け続けの敗北者に決定♪」

「敗北射精、気持ちよかったねえ？ あの気持ちよさ、また味わいたいよねえ〜？」

「安心して、あたしがたっぷり味あわせてあげるから♪」

「おじさんの心にい、敗北者の印、しっかり付けてあげるからね〜？」

「この先ずっと忘れられないくらい、負けの味を教えてあげるからね〜」

「すん、すんっ……はあ〜」

「くっさ 鼻がおかしくなっちゃうよお……♪」

「これが一生負け続け人間のクソザコ臭ってやつかなあ……超くさあ」

「すん、すん……はあ〜。すん、すん……はあ〜」

「え？ まだ大きな声出してないから負けてないってえ？」

「おじさあん、あんだけ思い切り射精しておきながらそれはないって。つまらない見栄張るのはよそ〜？」

「安心して？ おじさんはどれだけ頑張ったところで、もう一生勝てる人間になんてなれやしないよ」

「まだ勝てると思ってるのは、つまらなーい大人の意地っ張りな心のせい」

「本当は、心の奥底で理解してるはずだよ。自分が、敗北した最底辺の、出来損ないの負け犬だってこと」

「勝ちたい勝ちたいって口ではなんともいえるけどお、体は正直だよねえ」

「女の子にちんちん嗅がれてギチギチに勃起してるのが、その何よりの証拠」

「まだ分かってなかったの？」

「おじさんは、あたしにここに連れ込まれた時点で最初から、負けてたの！ 救いようのないクソザコ敗残者」

「アハ、やっとわかったあ？ 最初から勝負になんて、なってなかったの！ ざゝこ、キャハ」

「理解したんならあ、その無駄口きゅっと閉じて、負けをじゅっくりと噛み締めながら、おとなしくあたしの玩具になりさがってくださいゝい」

「あつは……あははは、あはははっ！ その悔しそうな顔、面白い」

「でもお、おじさんはあ、男のプライドズタズタに引き裂かれて勃起しちゃう、ゴミみたいなド変態なんだよねえ？」

「そんなおじさんのクソザコ敗北チンポはあ、かわいいミトラちゃんが弄んじやいます」

「じゃあ、お待ちかねの……フェラチオしてあげよっかあ……、はあ……」

「ふー……ふー……」

「ふふっ、すぐにフェラチオしてもらえんでも思ったあ？ ほくんと単純だよね」

「ばゝか、ざゝこ、あゝほ……そんな簡単にしてあげるわけないでしょ？」

「ねえねえ、おちんぽに息吹きかけられてえ、気持ちいい？」

「ふー……ふー……」

「アハ、まるで電流が走ったみたいに、ぴくぴくってしてるう」

「ふー……ふー……」

「ねえおじさん、あたしの息を辿って、頑張ってちんちんつきだしてよお……」

「あたしの唇にたどり着くことができれば、ご褒美にちゅぱちゅぱしてあげるから」
♪

「ふー……ふー……」

「鬼さんこちら♪ 息吹くほうへ♪ 鬼さんこちら♪ 息吹くほうへ♪」

「ふー……ふー……」

「ほらあ、もうちょっとだよお……もう少し腰突き出して、おちんぽ精一杯前に出してえ……あたしのお口はここですよお？」

「ふー……ふー……」

「ん……あはっ、あたしのベロに、やっとおじさんのおひんぽ届いたね……。よくでひまひたあ……♪ はい、じゃあ……」

「はあ、ふ……んちゅ……」

「ごほうびの、おちんぽファーストキス♪」

「ん、ちゅ……」

「今、すっごいぴくんっておちんぽはねたねえ？ おちんぽのファーストキス奪われちゃったのが、そんなに嬉しかったあ？」

「もっかいしてみよっかあ」

「んちゅ……ちゅう……」

「あはっ、腰が浮いちゃうほど気持ちよかったんだあ？ きんもーい！ 反応だけは一人前」

「ちゅっ……ちゅ……ちゅぱっ」

「んちゅ、ちゅー……ちゅるっ、ちゅー」

「どう？ 生まれて初めておちんぽちゅーされた感想は？ これだけで射精しちゃうそうになっちゃう？」

「やば、ちんぽザコすぎ……生まれついでのクソザコじゃん♪ ざーこ、ざーこ」

「ちゅ、ちゅぱっ……んちゅー……ぢゅるっ」

「我慢しすぎて、先っぽからおじさんの悔し汁どんどん溢れてくるんだけどお……唇に絡みついてきしゅーい」

「ちゅ、くちゅ、ちゅぷ、んちゅ、ちゅるっ……ちゅー」

「ちゅぱ、んちゅ……くちゅ」

「まだ軽くキスしてるだけだよ？ まさか、本当にもう射精しちゃうとかないよねえ？」

「おじさんの顔みてるとお、今にも思いつきリイツちやいそうだけど、まさかほんとにそこまでザコじゃないよねえ？」

「悔しいんでしょう？ あたしに勝ちたいんでしょう？ 見返したいんでしょう？ わからせたいんでしょう？」

「だったらあ、この程度のキスでザーメン汁ブツパとか絶対ありえないよねえく？」

「ほらほらあ、が・ま・ん！ が・ま・ん！」

「フレー、フレー、お・ち・ん・ぽ！」

「フレツ、フレツ、ちんぽ♪ フレツ、フレツ、ちんぽお♪」

「ぶふっ、ニタついてんの気持ち悪く……」

「それじゃ、ちゃくんと我慢して、女の子のいじわるおちんぽキス、もうっと楽しんでゃおうねえ？」

「ちゅぷ、ちゅぷ、ちゅぷ……んちゅ、ふちゅ、れちゅ」

「くちゅ、ちゅう……ん、ちゅ……ちゅう、ちゅぱ、ちゅぷ」

「ん、ちゅう……くちゅ、くちゅ……ちゅぷ、ちゅぱ」

「唇の感触気持ちいい？ 今までに味わったことのない感覚でしょ？」

「こゝんなかわいい女の子にちゅぱちゅぱおちんぽキスして貰えるなんて……負け組おちんぽでよかったでちゅねく♪」

「敗北者のくせに、贅沢なちんぽ……♪ 普通なら絶対ありえないんだよお？ よかったねえく♪」

「ちゅう、ちゅ……ん、ちゅ……れちゅ、ちゅぷ」

「ちゅぷ、ちゅぷ、ちゅぷ……んちゅ、ふちゅ、れちゅ」

「そういえば、ちょうどストックの飴が切れちゃってたんだっけ！ 口寂しいからあ、おじさんのおちんぽで我慢してあげる♪」

「ちゅぶ、んちゅ……ふ、ちゅ、るちゅ、れちゅ、ぢゅるっ……んちゅ」

「くちゅう、ちゅるう……んちゅ、くちゅ……ちゅぶ、ちゅう」

「ほらほら、動いちゃダメだよお……おじさんのおちんぽは今、あたし専用の飴なんだから」

「飴はひとりでに動いたりしないでしょ？」

「くちゅ、ちゅぶ、んちゅう……ちゅぶ、ちゅぶ、ちゅぶっ」

「くちゅ、ちゅう……ん、ちゅ……ちゅう、ちゅば、ちゅぶ」

「何その顔、なっさけなく。おじさんの半分以上も年下の女の子におちんぽ好きにされて、嬉しいがっちゃってるの？」

「やばあ、きもお……」

「ぺろぺろ……んぺろ……ちろ、ちろ」

「ぺろ、ぺろ……チロ……ちゅぶ、ぺろ、ぺろ……くちゅ、ぺろ」

「くちゅ……チロ、チロ……ぺろ、ぺろ」

「あれあれ、さっきよりもずっと、体がピクピクはねてるよ？」

「ザコチンポちゃん、あたしに舐められて、早く精液出したいって悔し涙ドロドロ溢れさせちゃってるねえ♪」

「ブザマな姿がお似合いだよ、おじさん♪」

「ペろ、ペろ……くちゅ、ちゅぷ……ペろ、んペろ」

「ちゅぷ……ペろ、くちゅ……ペろ、ペろお」

「ねえ、ギンギンにそそりたったこのクソザコおちんぼ、あたしのお口に啜えてほしいんでしょ？」

「わざとらしく、じゅるじゅる音を立てて……エロおくしゃぶってほしいんだ？」

「ペロペロされて、ふうふうされて、ちゅぱちゅぱされて……もうはちきれそうにパンパン……きんも」

「おじさんの我慢も、もう限界に近づいてきたみたいだし……そろそろ本気おしゃぶりしてあげよっか」

「はぁ……むっ」

「おじさんのおちんぼ、大きくて啜えづらいなあ……♪ 顎が外れちゃいそう」

「んむっ……じゅぶっ、じゅるるっ、じゅぶっ」

「んふっ、どお？ きもちいい？ あたしのやわらか唇におちんぼシゴかれて、最高？」

「んじゅるっ、ちゅう、ちゅぶ……くちゅ、んっ」

「亀頭を舌で包み込んでえ、竿を唇でシゴいてえ、そのままおちんぼ全体をナメナメ〜♪」

「ペろ、れろお……んれろ、くちゅ……ちゅるっ……れろお、れろお」

「もっと気持ちいい声出して……もっといっぱい喘いでよお、おじさん」

「ブザマで気持ちの悪い顔して、精一杯頑張って作った精液、無駄撃ちしちゃえ」

「あむっ、んむ……ちゅぷ、ぢゅぷ、じゅぷ……くちゅ……ちゅば」

「え〜？ 休ませてあげるわけないじゃん。全部搾り取るまで終わらないよぉ〜？」

「おじさんの負け犬チンポ、お手々も使ってシゴいてあげる♪ こうすると、もっとヤバいでしょ？」

「弱点だらけのクソザコチンポ〜♪」

「くちゅ、ぴちゃ……ぷちゅ、んちゅうう……ん、はあ」

「あんなに馬鹿にしてたお子ちゃまの、ナメナメお口セックス気持ちいい？ 女の子優位で、ずっとチンポいじめられるの最高でしょ？」

「もう、おじさんのおちんぽ……大人の女の人じゃ勃たなくなっちゃったかもねえ〜」

「おこちゃま女の子にしか勃起しない、変態でダメダメなクソザコ犯罪者チンポのできあがり〜♪」

「んふ、むちゅ……くちゅ、じゅる、じゅるるっ……んちゅぷ」

「そろそろ、いっぱいいいみたいだねえ？ このままお口の中で出ちゃうの？ ねえ出ちゃうのお？」

「あたしに舐められて、勝手に腰動いてんじゃん〜超生意気！」

「もしかしてえ、あたしのお口をオナホか何かと勘違いしてますか〜？」

「くちゅ、くちゅ、むちゅ……んちゅ、ぢゅるっ」

「ちゅぷ、ちゅぷ、ちゅぷ……んちゅ、ふちゅ、れちゅ」

「もう、しょうがないなあ……いいよお、おじさんの精液、全部あたしが搾り取ってあげるからね」

「女の子のお口に包まれて、敗北宣言しながらブザマに絶頂射精……しちやおつか」

「ぐちゅ、むちゅ……んちゅ、ちゅ、ぢゅる、ぐちゅ」

「ぢゅぱ、ちゅぱ、ちゅぱ、ちゅぱ……ぐちゅ、ちゅぷ、んちゅ」

「ぐちゅ、ちゅ、ちゅぼ、ちゅぼ、ちゅぼ、ちゅぼ」

「女の子のお口の中にい、無駄撃ち射精して種付けしちやお」

「ぢゅぽ、ぢゅぽ……んふ、くちゅ、ちゅぽ、ちゅぽ」

「ぐちゅ、ちゅぷ、れちゅ……ぢゅぽ、ぢゅぽ、ぢゅぽお」

「んふう、出る？ 出ちゃうんでしょ？ いいよ、思いっきり出しちやえ」

「いっちゃえ♪ いっちゃえ♪」

「ぢゅぱ、ちゅぱ、ちゅぼ、ちゅぼ、ぐちゅ、ぐぼ、ぐぼっ、ぐぼっ、ぐぼっ、ぐぼっ！」

「んっ……！ んんっ……！？ んふう……んんっ、んんんっ……！」

「……んむっ……んふう……んくっ……はああ……あふう……」

「あれえ、おじさん……もしかして、もうタマタマの中身全部出しきっちゃったのお？」

「え……うそお、きも〜。早すぎ〜！ 勢い良かったの最初だけじゃん、さすがにひくわ〜……」

「でもま、今まで遊んだ玩具の中では、まあまあ持ったほうだと思うよ〜？ よかったね♪」

「おじさん、結局あたしに完全敗北しちゃったね。残念でした！」

「あーあ〜、さ〜て、おじさんにも飽きちゃったし、そろそろ別の玩具探しに行こうっかな♪」

「ってことで、対ありでした〜！ おじさんの運がよければ、またどこかのゲーセンで会えるかもね」

「次に会うときまでには、もうちょっと強くなっておきなよ。格ゲーも、おちんぽも♪」

「リベンジいつでも受けて立ってあげるから！ それじゃ、またね。ばいばい……」

■Track05 終〜